

編集長インタビュー 全国IBMユーザー研究会連合会が、IBMユーザー論文を募集。 審査員から見た技術論文の勘所。

全国IBMユーザー研究会連合会(全国研)では、2002年8月から本年度の活動が新たにスタート。毎年春に行われるIBMユーザー・シンポジウムの準備も既に始まり、発表論文の応募申し込み締め切り(10月31日)も迫っています。本年度の論文委員会委員長に就任された佐藤 繁次郎氏(株式会社リコー IT/S本部 IT/S推進センター 所長)に、審査員側から見た技術論文について普段感じられていることを語っていただきました。聞き手は論文委員会委員でもある本誌編集長 斉藤 功です。

マネジメントの視点で論文を審査

佐藤さんは、昨年度の論文委員に続き、本年度は委員長に就任されたわけですね。

佐藤氏 そうなんです。普段の業務で、技術論文に接する機会はあまりないのですが...

会社では、普段どんなミッションを持っておられるのですか。

佐藤氏 IT/S推進センターの所長として、ITを活用して社内の業務改革を推進しています。IT/SとはInformation Technology & Solutionの略です。

業務革新の推進部門ということでしたら、技術論文とも関係が深いのではないですか。

佐藤氏 残念ながら業務で部下の書いた論文、特に技術論文を読むということはあまりないのが現状です。それに、当社では、どちらかというとパテントの取得を重視しています。まあ、自分が取り組んだテクノロジーの成果を世に問うということでは、論文もパテントも同じかもしれません。それによって、技術者個人

としても会社としてもレベル・アップにつなげるということですから。その意味では、論文委員として論文を読ませていただくことも、会社で業務として取り組むべきことと一致しているといえるで



株式会社リコー
IT/S本部
IT/S推進センター
所長
佐藤 繁次郎氏

しょう。システムで実現しようとしているソリューションの工夫をいかに読み取るかということですね。

論文の審査に当たっては、特にどの辺りに注目されますか。
佐藤氏 私自身、社内の業務改革に取り組んでいることもあって、論文のテーマとなったプロジェクトを通じ、会社にどんな改革をもたらすことができたのかが主な関心事になります。システムの規模が大きかったり、最新テクノロジーを使っている論文は、それだけで大きなインパクトがありますが、論文委員会の審査基準を尊重しつつも、改革に対する取り組みの工夫とその成果を、自分なりの視点で評価するように心掛けています。

エンジニアの視点ではなく、マネジメントの視点で、論文を評価されるということですか。

佐藤氏 そういうことになるかもしれませんが、もちろんテクノロジーについても関心を持たないわけではありませんが。

今日ではシステム部門といえどもROK(Return on Investment:投資利益率)などのコスト意識が強く求められていますから、佐藤さんのようにマネジメントの視点でテクノロジーを評価することは大切だと思います。

評価能力が試される論文審査

佐藤氏 それともう一つ。読んでいる途中で審査基準が変わってしまわないように、休みの日に一気に読んで各論文の感触をつかむようにしました。そうやって全体の論文レベルを頭に入れ、準入选や佳作を選んでいって、最後に各論文に対するコメントをしていきましたから、都合、最低でも3回は読みましたかね。

是非はともかく、部下の方々に読ませている方も少なくないようですが、佐藤さんご自分で論文をじっくり読み込まれていったのですか。

佐藤氏 部下に読ませるとするのは、まあ、若い人の方が最新のテクノロジーに通じているということもあるでしょう。仕事もいっしょですが、上司が最終的に責任のある判断を下せばいいわけですから。それに、若い人に評価させるということは、外の世界に触れさせたり、評価能力を身に付けさせるという点で意味のあることだと思います。

私自身は、自分で読むものだと思っていましたし、また、実際に読んでみると面白かったので熱心に取り組んだということです。

評価能力といえば、昨年度の論文の審査では、佐藤さんと私の評価が結構一致していたんですよ。佐藤さんの関東研(関



東IBMユーザー研究会)でのご活躍を知っていただけて、うれしい結果でしたね。

佐藤氏 そうなんですか。そう言ってもらえると私もうれしいですね。それにしても論文の評価というものはなかなか難しい作業だと思います。ある意味、審査する側の評価能力が評価されるわけですから。

それは痛切に感じています。実は日本アイ・ビー・エム社内では、毎年、多くの論文が発表されています。昨年は、プロフェッショナル論文800編、経験事例論文1,200編、都合2,000編の発表があり、社内のさまざまな立場の人が評価しているのですが、本当に論文を評価するのは難しいと思います。

佐藤氏 基本的には、論文委員会の審査基準に従って評価するわけですが、やはり審査員一人ひとりで価値観が異なりますからね。私としては、先ほども述べたように「どんなテクノロジーを使っているのか」ということよりも「どんな工夫をして、どんな成果が出たのか」が書かれている論文を推したいですし。

論文を、マネジメントの側面から見るか、技術的な側面から見るかによって評価が変わるということはあるでしょうが、ただ、優れた論文はどちらの面から見ても優秀だということはありますね。実は私は、論文を審査しつつ、本誌で取り上げる論文を探してもいるんですよ。本誌では、毎号「お客様事例」や「お客様いんたびゅう」ということでお客様の取り組みを紹介させていただいているのですが、その半数以上は、全国研の論文の中から選ばせていただいたものです。事例として面白く、マネジメント層にも訴えるものがあり、読者の方々に興味を持っていただけたようなプロジェクトを選び、あらためて著者を含むプロジェクトのメンバーの方々にインタビュー



論文審査の様子

させていただいているのです。

佐藤氏 全国研の活動が『ProVISION』誌の誌面づくりにも役立っているということですね。

審査結果のフィードバックが大切

優れた論文は、『ユーザー・シンポジウム論文集』に集録され、またIBMユーザー・シンポジウムで発表の機会を得るわけですが、それだけでなく本誌などを通じて多くの方の目に触れる機会を設けたいと思っています。

佐藤氏 そうですね。選に漏れた論文にも必ず優れた点がありますから、何らかのフィードバックをしてあげるのは、審査した側の義務でしょう。評価を下した責任があるわけですから。その意味では、それぞれの論文に対して、優れている点や不足している点をきちんとコメントして返す必要があると思っています。私たちの評価が、著者の方々に一つでもプラスになればと願っています。

論文の中には、内容やアイデアは素晴らしいのに、残念ながら表現がやや分かりづらく、本当に惜しいなあと思うようなものもありますが、その点はどうですか。

佐藤氏 審査に当たっては、表現力が不足しているからといって、それだけで切っ捨ててしまうことはありません。なるべく著者の意図をくみ取るように心掛けています。それに論文の評価の中に「表現力」という項目があり、表現がたつなければ表現力の評価は低くなるわけですが、ほかの評価項目で高い評価を得れば、総合点で高得点となりますから。

本年度の論文応募の申し込みが迫っているわけですが（2002年10月末。ただし、論文提出の締め切りは2003年1月末）本年度の特色を教えてください。

佐藤氏 本年度のユーザー・シンポジウムは米どころの新潟で開催されることもあって「共有への提言～稲は人の足音を聞いて育つ～」という大会テーマを掲げています。このテーマに合わせて、「一般論文」とは別枠で、「IT社会における情報システムにかかわる人材育成について」というテーマで提言型および事例型の論文を募集しています。同一テーマの論文が集まるということで、同じ土俵でのレベルの高い審査になるんじゃないかと期待しています。



昨年度のユーザー・シンポジウム論文集